

ギリシアの初期鉄器時代の遺跡（7） アテネのアカデメイア

高橋 裕子

Early Iron Age Sites in Greece（7） The Academy of Athens

TAKAHASHI Yuko

The seventh paper of “Early Iron Age Sites in Greece” takes up the Academy of Athens, well known as Plato’s Academy. Based on Mazarakis Ainian’s work, the paper reviews the archaeological materials from the site, and discusses its religious features in the Early Iron Age, with special emphasis on the “Sacred House”.

はじめに

アテネのアカデメイア（アカデミア）は、ケラメイコスにあった古代の市門ディビュロンから1.5km前後北方に行った場所に所在する著名な遺跡である¹（図1）。コロノス・ヒッピオスの丘陵の南西側に位置しており、また近くにはケフィソス川が流れ、古代においては豊かな自然に恵まれた場所であった。世界史上このアカデメイアが有名な理由は何よりも哲学者プラトンの学園が設立されたことにあるが、ただし初期鉄器時代の資料も出土しており当該期の研究においても重要な存在である。

アカデメイアという地名はプルタルコス（テセウス伝、32）にも言及がある半神アカデモス（ヘカデモス）に由来する。ただしこの場所ではアカデモスのみならずエロス、プロメテウス、ムーサ、アテナなど多くの神々が祀られていたことが史料的に確認されており、神聖なる土地であった²。“神苑”と表記する研究者がいることも理解されよう³。アカデメイアに関しては幾つもの古典史料に記載があり、たとえばキケロは次のように言及している。

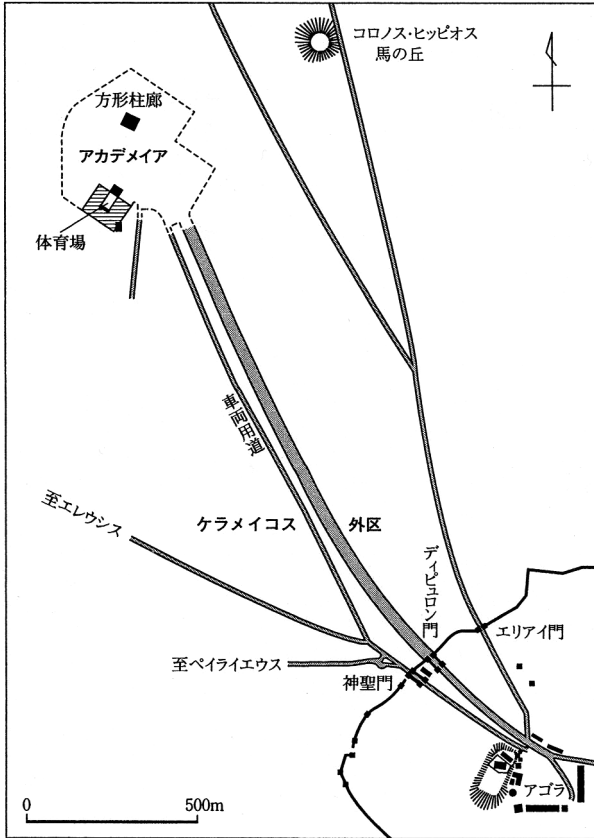


図1 アテネの市壁北西部とアカデメイア
(出典：廣川 1999、20頁、図1)

「…私たちはいろいろな話をしながらディピュロン門からの六スタディオンの道程をこなした。かくして、名高いのも当然なアカデメイアの歩道に着くと、そこには私たちが望んだ静寂があった。」(『善と悪の究極について』V, 1, 1)⁴

このような古典史料の記載からアカデメイアのおおよその位置は既に18世紀の終わりまでには特定されていた⁵。20世紀に入ると発掘が開始され、考古学的にも本格的な研究の幕が上がることとなる。この遺跡ではギリシア人研究者が発掘を担っており、まずは1929～1940年にかけてK. クルニオティスの監督

のもとにP. アリストフロンによる調査が行われた⁶。アリストフロンの死後、ギリシア考古学協会の調査として1955年からP. スタヴロプロスが新たに発掘を開始した。スタヴロプロスの調査は1963年まで継続され、緊急発掘でありながら⁷、重要な成果が獲得されている⁸。ただしこれら一連の調査成果の公表は概報にとどまっており、詳細な発掘報告が出されることはなかった。

半世紀前後そのままの状態が続いたが、21世紀に入ってから初期青銅器時代や本稿の対象である初期鉄器時代に関する詳細な論考が公表され、アカデメイアは現在あらためて脚光を浴びている⁹。近年初期鉄器時代研究においては過去の未報告資料が詳細に公表されたり、または再調査により新たな知見がもたらされたりする事例が増加傾向にあり、それらが研究の進展に大いに寄与しているが、アカデメイアもかかる事例の一つに含まれよう¹⁰。

本稿ではまず次項にて遺跡全体の概要を把握したあと、初期鉄器時代に焦点をあててアカデメイアの資料を検討していきたい。

1 遺跡の概要

（1）初期青銅器時代の“アカデモスの家”

アカデメイア一帯の人的活動の痕跡は古くは新石器時代にまでさかのぼることが確認されているが¹¹、この遺跡が大きな注目を集める最初の時代は初期青銅器時代である。この時代を代表する土器のタイプであるソースボートを含む種々の土器片が出土しているのみならず¹²、馬蹄形（apsidal）の建造物が発掘されたからである。場所はアカデメイアの遺跡の中でも北西部分で、後述する初期鉄器時代の“聖なる家”の北側である（図2および図3）。1956年にP. スタヴロプロスにより発見され、“アカデモスの家”と命名された¹³。念のために記すが、この遺構からアカデモスとの関連を示唆する何らかの資料が発見されたわけではなく、“アカデモスの家”という名称は調査者の恣意的な判断によるものである。

この建物の図面や写真が公開されるとアテネ近郊における初期青銅器時代の稀有な建造物資料として研究者の耳目を集める存在となった。しかし土器をはじめとした出土遺物について詳細な報告は発表されず、不明な点も少なくなかった。そのまま何十年もの月日が経過したが、2013年に遺跡公園の整備に伴う再調査が行われ、2020年にその成果の一端が公表されたことにより、ようやく資料状況が改善された¹⁴。以下、その論考の記載をもとに、“アカデモスの家”

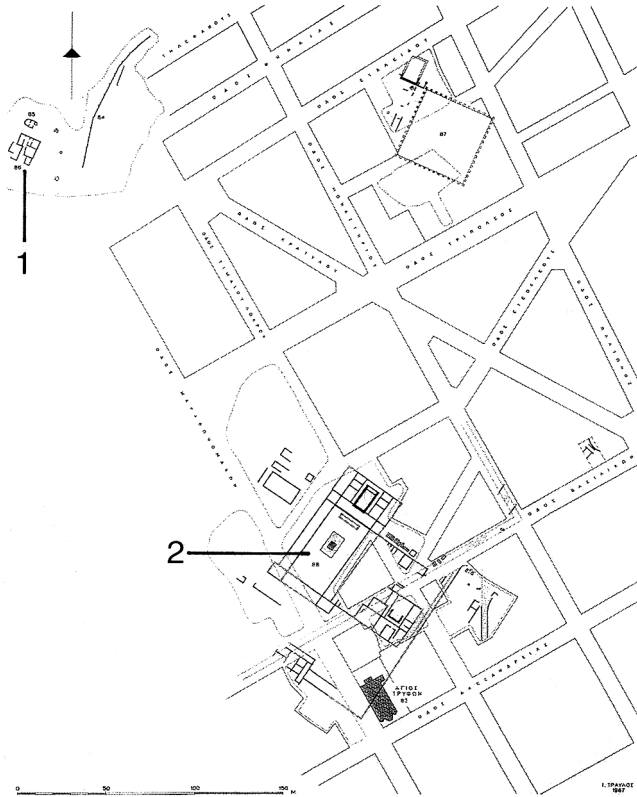


図2 アカデメイアの遺跡

(1 : “聖なる家”、2 : 体育所。出典 : Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 179, fig.1. ただし、1と2の番号は筆者の加筆)

について簡潔に紹介していこう。

建物の形状は馬蹄形を呈しており、石製ブロックで構築されていた。三つの部屋から構成されており、各部屋の概要は下記の通りである。

・ 部屋1

楕円部分を含む北西側の部屋で、大きさは内部の計測で2.20×3.10mである。

・ 部屋2

ほぼ長方形の中心的な部屋で、大きさは内部の計測で2.10×3.40mである。

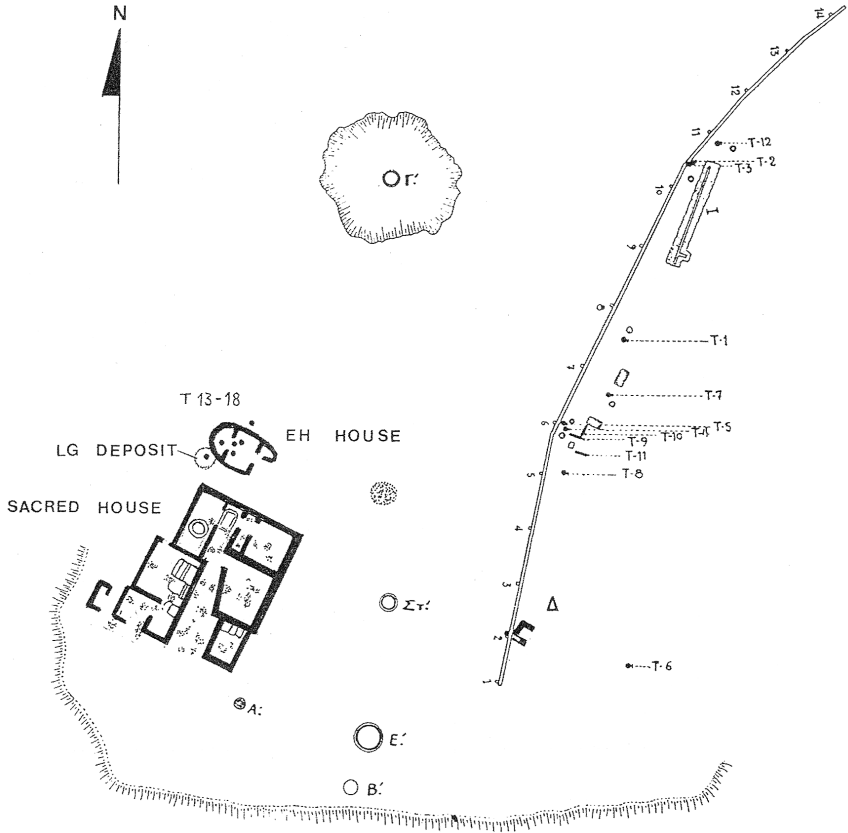


図3 アカデメイアの青銅器時代および初期鉄器時代の遺構

(EH House：初期青銅器時代の建造物“アカデモスの家”、Sacred House：初期鉄器時代の建造物“聖なる家”。出典：Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 180, fig.3)

・部屋3

北東側の小規模な部屋で、大きさは内部の計測で0.80×0.80m前後である。壁が丸みを帯びている箇所があり、部屋2の直線的な壁とは明確に区別されるため、後に増築された可能性が推測されている。

これ以外に部屋3の北東側からピットA、部屋2の内部からピットBが発見されている。また現在のところこの近辺で初期青銅器時代に属する同様の建造物は発見されていないため、この建物が集落に属する一軒なのか、あるいは孤立した家屋なのかを含めて全体像は未だ明確ではない。他地域の資料との比較も含めて初期青銅器時代全体の時代像の中に、この建造物がどのように位置づけられるのかも今後の課題であろう。2013年の調査に関する詳細な報告はいずれ公表される予定であり、刮目して待つこととしたい¹⁵。

ところで本稿の対象である初期鉄器時代との関係で重要なことがらとして、“アカデモスの家”の部屋1の一部が幾何学文様期に破壊されたことが確認されている¹⁶。ということは初期鉄器時代の人々がはるか古の初期青銅器時代のこの建物の存在を認識していたことは明らかであり、それが初期鉄器時代の宗教行為と結び付けられて論じられてきた。これには発掘を担当したスタヴロプロスが“アカデモスの家”をアカデモス信仰と関連づけていることが大きく影響しているが¹⁷、この点に関してはのちに改めて言及することとしたい。

この一帯の青銅器時代に関しては、その後の中期青銅器時代¹⁸や後期青銅器時代の資料も発見されている¹⁹。そして後述するように初期鉄器時代については重要資料が豊富に出土している。すなわちそれは、川に近いこの場所が通時的に居住に適した環境にあったことを示唆していよう。

(2) 体育所とプラトンの学園

アカデメイアは前6世紀末にヒッパルコスによって周壁で囲まれた²⁰。また体育所も設けられ、多くの人々が集まる場となっていった²¹ (図2)。

そして前387年ごろに哲学者プラトンの学園が設立されたことにより²²、アカデメイアは後世に名を残す特別な場所となっていく。身体的な鍛錬に励む体育所に隣接した土地に、知的営為のための学園が設けられたのである。この学園は哲学や数学、天文学など諸学問に関する当時最高レベルの研究および教育機関であり、幾度かの危機を乗り越えて900年以上もの長きにわたって存続しえた²³。東ローマ皇帝ユスティニアヌス一世の命により後529年に閉鎖されるまで、アカデメイアは学問および研究の中心的な拠点であり続けた。さらにそれがヨーロッパを中心に現代にいたる学問の発展に多大な影響を与えたことは、周知の事実である²⁴。

2013年8月にはプラトンの学園創設2400年を記念する哲学集会が、アカデメイアで開催されたという²⁵。今もって世界中の人々の耳目を集めるこの遺跡が

どのように発展していったのか、その要となる初期鉄器時代について、次項では見ていくこととしよう。

2 初期鉄器時代の資料

アカデメイア一帯からは既に1932～1933年に初期鉄器時代の資料が出土しており²⁶、さらにその後のスタヴロプロスの調査で“聖なる家”をはじめとする重要な遺構が幾つも発見された。それにより概説書などで取り上げられる価値の高い遺跡と見なされるようになったが、詳細に関しては不明なことも少なからず存在した。1995年にマザラキス・アイニアンがスタヴロプロスの調査日誌を含む資料を研究する許可を獲得し²⁷、その成果が21世紀に入ってから公表されたことにより、本格的な研究の端緒が開かれたと言える²⁸。

以下、各々の資料について検討していこう。

（1）初期幾何学文様期の土器の集中出土地点

後述する“聖なる家”から150m前後南西方向に行った地点で、初期鉄器時代の土器が200個以上発見された²⁹（図4）。その一部は一列に並べられており、

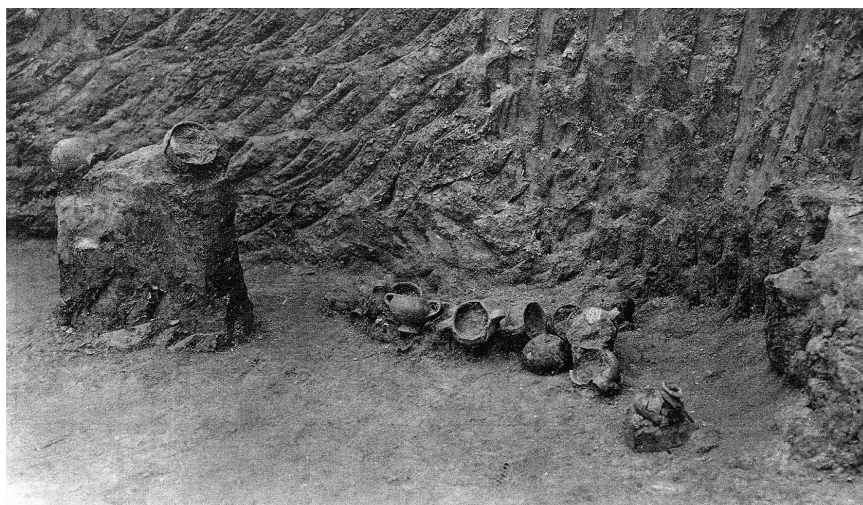


図4 初期幾何学文様期の土器集中出土地点
（出典：Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 179, fig.2）

無造作に廃棄されたものではないことがうかがわれる。出土したのは地表面から2.7~3.7mほど掘り下げられた場所であったが、これらの土器が発掘された層は灰が主体であり、獣骨も含まれていた。そしてそれらの獣骨は焼成を受けたものとそうでないものの双方が存在した³⁰。

出土土器の種類は限定的であり、カップとカンタロスである（図5）。すなわち双方ともに口縁部が広く、飲用に適した器形である。取っ手や口縁部が一部破損しているものもあったが、大半が完形品、もしくはほぼ完形品の状態で発見された。土器の時期に関しては議論があるが、それはアンフォラのように詳細な時期区分が可能なタイプの土器が出土していないという難点に起因している。調査者は原幾何学文様期と考えていたが、幾何学文様期の土器研究の大家であるJ. N. コールドストリームが最終的に初期幾何学文様期と判断し³¹、現

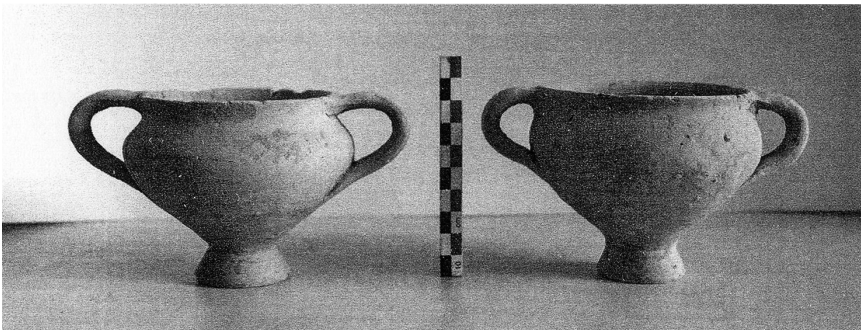


図5 初期幾何学文様期の土器

(出典：Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 181, fig.4a-b)

在でもそれが肯定されている³²。

問題は特定のタイプの土器が多量に発見されたこの遺構の性格であるが、獣骨および飲用に適した土器が出土していることから、おそらくは動物犠牲や神酒を飲用することを伴う儀礼行為が行われていたと解釈されている。さらに出土土器の数が顕著に多数であることを考えるならば、頻繁にないしは定期的にこの場所で宗教儀式が執り行われていたと判断されよう³³。

初期鉄器時代の宗教関連資料は神殿が誕生する後期幾何学文様期になると増加する傾向があるが、それ以前に関しては必ずしも豊富ではない。というよりも他の時代と比較するならば、むしろ僅少とさえ言える。かかる資料状況の中でこの遺構は稀有な事例であり、また宗教建造物を伴わない儀礼行為の痕跡として注目される。

（2）“聖なる家（Sacred House）”

アカデメイアの丘陵の北西斜面から幾何学文様期の建造物が発見され、“聖なる家”と命名されている（図2および図3）。この名称の由来はエレウシスの聖なる家と類似していることにあり³⁴、それと同様に初期鉄器時代の稀有な宗教施設としてとみに注目を集めてきた。

“聖なる家”がスタヴロプロスにより発掘されたのは、1958年から1964年にかけてのことである³⁵。その概報が発表されて以降³⁶、この建物および出土遺物は初期鉄器時代の重要資料と見なされるようになり、それが証拠に概説書³⁷、当該期の建造物に関する著作³⁸、英雄崇拜をはじめとする宗教や信仰に関する論文など³⁹、多岐にわたる文献において頻繁に取り上げられてきた⁴⁰。発掘されてから半世紀近くが経過した2010年および2011年にマザラキス・アイニアンとの共著論文が相次いで公表されたことにより、近年はより一層注目度が増している⁴¹。以下、基本的な事柄から検討していこう。

“聖なる家”の大きさは北側が11.60m、東側が14.80m、南側が17.70m、西側が14.60mであり⁴²、少なくとも7つの部屋から構成されていた（図6および図7）。初期鉄器時代の建物としては稀有なことに、一部の例外的な箇所を除いて、切り石ではなく日干し煉瓦（mud bricks）で建造されていた。にもかかわらず90cmの高さに至る壁が残されていたところもあり⁴³、脆弱な造りではなかったことをうかがわせている。調査日誌を含めて詳細にこの遺構を検討したマザラキス・アイニアンとの共著論文によれば、“聖なる家”の建造は少なくとも3回の時期に区分される⁴⁴。元来は主要な部屋（ α と α' ）と部屋Bだけの



図6 “聖なる家”

(西方からの撮影。出典：Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 182, fig.6)

構造であったが、その後徐々に他の部屋が付け加えられていった⁴⁵。全体の形状が厳密な長方形ではなく不整形な箇所があるのは、それが原因であろう。

ところで“聖なる家”を発掘したスタヴロプロスの概報に関しては、幾つもの批判や異論が提出されている。たとえば部屋 ζ には直径1.55mの円形遺構があり、灰や幾何学文様期の土器片が出土したが⁴⁶、スタヴロプロスはそれを炉と判断した⁴⁷。これに対して大型のピソスを埋設した場所に灰が入れられるようになったという異論が提出され⁴⁸、さらにマザラキス・アイニアンは後者の意見に対して否定的な姿勢を示している⁴⁹。このように“聖なる家”の詳細に関しては今後もさらなる検討が求められる。

そして様々な議論がある中で最も問題となる点が、この建物の機能および用途である。その形状からは確たる判断を下すことは不可能であるが、ただし“聖なる家”という名称が端的に示唆しているように、この建造物では宗教儀式が執り行われていたと一般に見なされてきた。その理由は建物の内部から灰、炭化物、土器片、紡錘車、さらには焼成を受けた動物の骨が出土しているからである⁵⁰。これらの遺物が動物犠牲を伴う宗教儀式が行われた痕跡であると解

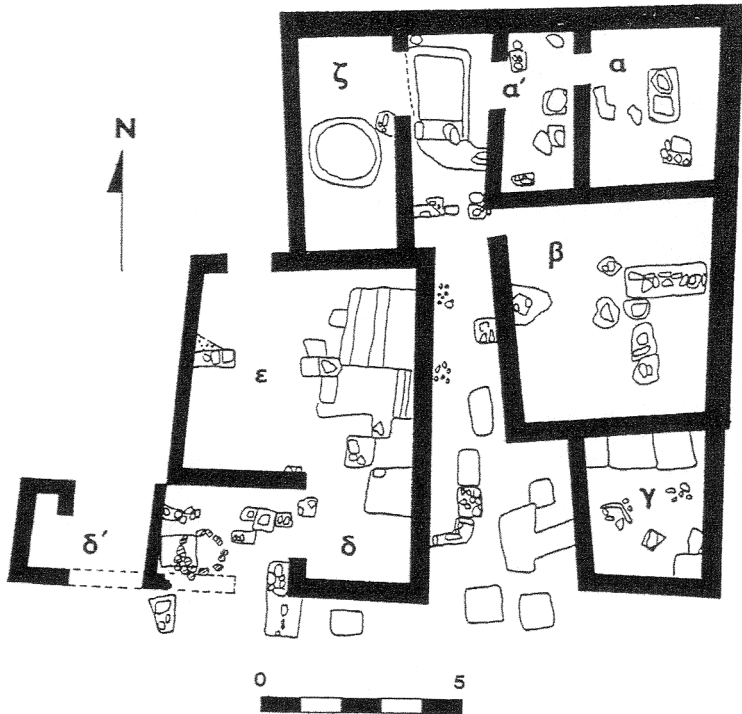


図7 “聖なる家”

(出典：Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 183, fig.7)

積され、それが多くの研究者に肯定されてきた⁵¹。宗教施設ではなく農場の居住用建造物など異なる意見が提出されたこともあったが確たる根拠があつてのことではなく⁵²、またそれが人口に膾炙することもなかった。年代に関しては、灰が主体の層位から出土する遺物の大半は前8世紀の最終四半世紀から前7世紀の第一四半世紀にかけてのものであるため、それが宗教儀式が行われた主要な時期と判断されよう⁵³。

スタヴロプロスはさらに、この場所での宗教儀式は最初は屋外で行われていたという意見も提出している。灰を含んだ上記の層位は少なくとも5層確認されているが、その最下層は一部壁の下に続いているため、宗教儀式が行われるようになった時期の方が建物の建造よりも先んずると考えた結果である。しか

しかかる資料状況が発見されるのは増築された区域、すなわち当初は屋外であった場所からであることが指摘されており、宗教儀式は建物の内部およびその前面で執り行われたという意見が提示されている⁵⁴。また部屋εからは土でコーティングされた平行な二本の溝が発見されているが、スタヴロプロスはそれらは動物犠牲が行われた際の血液を流すためのものと考えた。しかしそれに対してはワインの圧搾に伴う設備という異論が提出されている⁵⁵。

上記のようにスタヴロプロスの意見の細部に対しては種々の批判が提示されているが、私見ではこの建物で儀礼行為が行われていたことは肯定していいと判断している。ただしそのプランに関して言えば神殿とは異なるタイプの建造物であり、元来は居住用の家屋であったとも考えられよう⁵⁶。

またスタヴロプロスの意見で深刻な問題となる点は、ここでの宗教儀式を先に記した“アカデモスの家”と関連づけて、“聖なる家”を半神アカデモスに対する信仰の場であったと推測している点である⁵⁷。両者は近接しており、また上述のとおり“アカデモスの家”は幾何学文様期に破壊を受けている。したがって初期鉄器時代の人たちがはるか古くにさかのぼる初期青銅器時代の建物“アカデモスの家”を偶然に発見し、その存在を認識していたことは明らかである。また初期鉄器時代の人々が青銅器時代の遺構を信仰または崇拜した事例はギリシア各地から多数確認されており、祖先崇拜や英雄崇拜として論じられてきた⁵⁸。しかし“聖なる家”における信仰の対象は不明であり、アカデモスであったとは結論できない⁵⁹。またその信仰が初期青銅器時代の建造物と関係があるか否かも明らかではない。この問題が複雑化もしくは混乱した要因の一つは初期青銅器時代の建物が“アカデモスの家”と命名されたことにあり、資料的根拠が存在しないにもかかわらず恣意的にかかる名称が与えられたことには重大な責任がある。

(3) 堅穴および“アカデモスの家”一帯の子供の墓

アカデメイア一帯からは何らかの目的のために掘られた初期鉄器時代後期の堅穴（ピット）が、二か所から発見されている。

まず一つ目は、初期青銅器時代の建造物“アカデモスの家”の北西部分である。この建物を一部破壊して、同じ場所に、時期が前後する二つの堅穴が掘られた。最初に造られた堅穴は直径が3.20m、深さが2mで、後に造られたものよりも開口部が大きくまたより浅い形状を呈している。後期幾何学文様期IIa期の大型アンフォラや後期幾何学文様期IIb期のクラテルなどが発掘された。

この堅穴は焼成を受けており、厚さが25～30cmもの焼土層が発見されていることは付言されるべき要素であろう⁶⁰。

次に、この最初の遺構を掘り込んで二番目の堅穴が造られた。この堅穴の大きさは直径が1.20m、深さは4mほどあり、最初のものとは比べると細くて深い形状をしている。ここからアンフォラやオイノコエ、スキュフォスなど、後期幾何学文様期の土器が合計で40個前後出土した。土層は9層に分かれておりすべての層からアンフォラが発見されたが、それらはいずれも横に寝かされた状態で注意深く配置されていた。土や炭化物が含まれていることはあったがアンフォラの中から特筆すべきものは何も発見されておらず、それらの用途や機能を判断する決定的な材料は存在しない。また土器以外の遺物としては鉄製品が発見されている⁶¹。

この堅穴に関する特徴的なことがらとして、九つに区分される各層位の遺物の新旧関係が順序立っていないことがあげられる。周知のように層位的原則としては、地層累重の法則と同様に、下方にある層位が古く上方にある層位が新しいが、この堅穴にはそれが該当しない。出土遺物全体の時期としては後期幾何学文様期から前古典期初期にかけてであり統一性があるが、その中でも異なる時期の土器が一つの層位から発見された箇所もある。そのためおそらくは前7世紀初期のある時期に、これらの土器は一斉に埋められたのではないかと推測されている。さらに同様に深い堅穴から多数のアンフォラが発見された他遺跡との比較から、子供の共同埋葬地であった可能性が指摘されている。もしくは、直径に比して深さがあるという遺構の形状に鑑みて、本来は井戸であったがのちに埋葬に転用されたのではないかという仮説も提起されている⁶²。

二か所目の堅穴は初期青銅器時代の建造物“アカデモスの家”から47m前後南西方向に位置しており、大きさは直径が2.20m、深さは5.25mである。12個の土器が発見され、そのほとんどはアンフォラであった。時期は前8世紀後半から前7世紀初頭のものである。スタヴロプロスの調査日誌（1957年4月12～13日）には炭化物や紡錘車などの遺物が出土したことも記されており、注目すべきは焼成を受けていない骨片が発掘されていることである。しかし遺憾なことに、それが人骨か獣骨かなど詳細は不明である。遺構の形状および出土遺物の双方から判断して、“アカデモスの家”を壊して造られた上記の深い方の堅穴との類似性は顕著であり、おそらくその用途も同一のもの、すなわち子供の共同埋葬地であったであろうと推測されている⁶³。

そしてこれらの仮説を補強する資料が、“アカデモスの家”一帯から発見さ

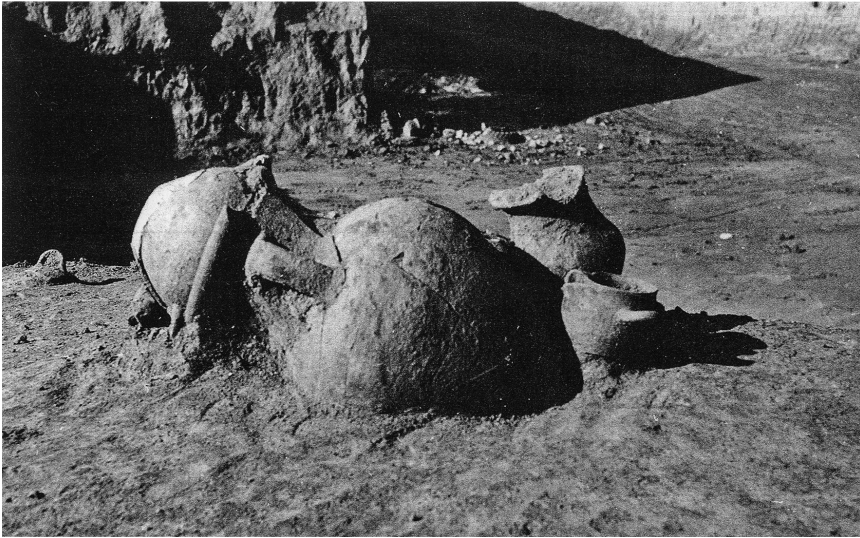


図8 子供の墓

(出典 : Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 186, fig.23)

れた7基の墓(2~8号墓)である(図8)。すべてアンフォラに遺骨を納めたタイプの墓で、主軸方位を北-南方向としてアンフォラを横に寝かせた状態で安置されていた。スタヴロプロスによればいずれも火葬された遺骨が納められており、2号墓のみは成人、それ以外は子供の墓であったという⁶⁴。しかし実際に火葬墓であったか否かに関しては、現在では疑問に呈されている⁶⁵。

(4) 周壁周辺の墓と建造物V

“アカデモスの家”および“聖なる家”から北東方向に位置する後代の周壁周辺から、幾何学文様期から前古典期に属する墓群が発見された。1957年に2基が出土し、その後も1958年に2基、さらに1959~1960年にかけては12基が発掘された。1957年に発見された墓の1基には後期幾何学文様期IIIb期に属するアンフォラが使用されており、その頸部には戦士が描かれている(図9)。ディピュロンの盾と称されている後期幾何学文様期の図柄に特徴的な武器を有した戦士であり、アカデメシア出土の初期鉄器時代の遺物の中でも著名なものの一つである。

このような墓が発見されているということは近隣に居住していた人々が存在

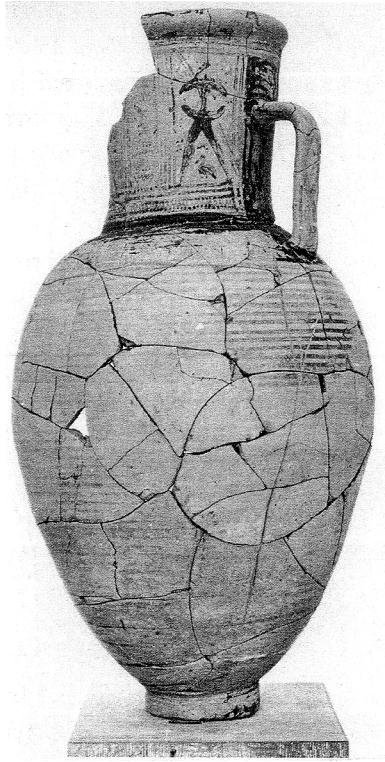


図9 後期幾何学文様期のアンフォラ
(出典：Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 188, fig.30a)

したことを示しているが、事実、この墓群の南方から幾何学文様期の建物が発見されている⁶⁶。長方形もしくはギリシア語のアルファベットのΠのような形状を呈しており、建造物Vと呼称されている遺構である。その機能について確実な結論を導き出すことは不可能であるが、宗教や信仰など特別な目的で使用されたことを示唆する資料は報告されていないことから、居住関連の建造物と見なすことが妥当であろう。初期鉄器時代の後期のこの一帯は、おそらく家屋が点在しその近辺に墓が設けられた居住域であった⁶⁷。

おわりに

初期鉄器時代のアカデメイアの資料は解釈が困難である。個々の遺構に関して不明なことが多い上に、相互の関係性を導き出すことが難しい。それでも、ここであらためて上記の資料を振り返りながら、若干のことを記していきたい。

アカデメイアの初期鉄器時代の資料は、時期的に大きく二つに区分される。最初が初期幾何学文様期であり、次が後期幾何学文様期である。前者は初期鉄器時代の半ばに、後者は初期鉄器時代の後期に該当する⁶⁸。

まず初期幾何学文様期の資料は200個以上もの土器が集中的に発見された遺構である。飲用のための特定の器形のみが選択されていることや獣骨を含む灰の層が出土していることから、動物犠牲や神酒の飲用を伴う儀礼行為が行われた痕跡であると結論される。初期鉄器時代の半ばの時期に関してかかる宗教関連資料が発見されることは稀有な事例であり、また建造物を伴わない儀礼行為の痕跡として注目されよう。疑問に思われる点は周辺一帯から初期幾何学文様期の住居址や墓が出土していないことであり、現段階の資料状況ではこの遺構のみが孤立した状態で発見されている。したがってこの時期のアカデメイア一帯の全体像は未だ明らかではない。

この資料の時期である初期幾何学文様期に後続する中期幾何学文様期に関しては、公表されている資料による限りその様相は不明であり、一時期過疎化していた可能性があるのではないかとも考えられる。ただし公開されていない遺物の中にこの時期のものが含まれていることもありうるので、今後の研究の進展を期待したい。

そして後期幾何学文様期になると資料が増加する。この時期のアカデメイアには居住する人々が一定数存在し、また墓も設けられた。この後期幾何学文様期に関して何よりも重視されるのが“聖なる家”であり、この建物で儀礼行為が行われていたことは明らかである。ただし神殿とは異なるタイプの建物であり、元来は一般の家屋であった可能性もあろう⁶⁹。

長らく議論の俎上にあげられてきたのが“聖なる家”での宗教行為と初期青銅器時代の“アカデモスの家”との関係、さらにはその信仰の対象が半神アカデモスであったかという問題である。これらに関しては、筆者はいずれも肯定していない。“アカデモスの家”が後期幾何学文様期の堅穴により一部破壊されていることからその時期の人々が初期青銅器時代の建物を認識していたことは明らかであるが、それと“聖なる家”における宗教行為との関係を立証する

資料は存在しない。初期鉄器時代に青銅器時代の遺構が崇拜された事例は数多く発見されているが、そのような場合は、たとえばミケーネ時代の横穴墓から初期鉄器時代の遺物が出土するように、青銅器時代の遺構そのものが信仰や崇拜の対象となっている⁷⁰。アカデメイアの場合は“アカデモスの家”から初期鉄器時代の遺物が出土しているわけではなく、崇拜された痕跡はない。したがって“聖なる家”の宗教行為との関係は認められないと結論される。また“聖なる家”における信仰の対象に関しては一切の資料は存在せず、半神アカデモスであったとは確認されない。

さらに問題となるのが、子供の墓が“聖なる家”の近くに作られていることである。疫病で多数の子供が死亡し、その弔いのための儀式が行われたのではないかという推測も提示されているが、仮説の域を出るものではない⁷¹。“聖なる家”における宗教行為に関しては、さらなる検討が必要であろう。

アカデメイアの資料は発掘調査の際に詳細な記録がとられていないこともあり、未だ不明なことが多い。それでも初期鉄器時代における稀有な事例としてその重要性が減じられることはない。解釈が難しいこの時代のアカデメイアに関しては、さらなるデータの公表が期待されると同時に、他遺跡との比較など巨視的な視点からの分析も求められる。初期鉄器時代に関する全体像の構築を目指す上でこの遺跡は大きな意味を有しており、今後も研究の進展を刮目していきたい。

-
- 1 後述するようにアカデメイアからは初期青銅器時代の建造物が発見されているが、それに関してアクロポリスから2.8km北西に位置していると記載している文献がある (Eliopoulos 2020, 349)。
 - 2 Travlos 1971, 42.
 - 3 廣川 1999, 21-25頁。
 - 4 訳文は、永田康昭・兼利琢也・岩崎務訳『キケロー選集 10』岩波書店、2000年、264頁からの引用である。
 - 5 Travlos 1971, 42.
 - 6 これらの調査の概報として、*ΠΑΑ* 5, 1930, 420-424, *ΠΑΑ* 8, 1933, 70-71, 246-248. さらに、cf. *BCH* 54, 1930, 459-460, *BCH* 55, 1931, 466, *BCH* 57, 1933, 250-251, *BCH* 59, 1935, 251, *BCH* 60, 1936, 458-459, *BCH* 61, 1937, 449.
 - 7 発掘調査の背景に関しては、Mazarakis Ainian & Livieratou 2010, 87.
 - 8 これらの調査の概報として、*Εργον 1958* 1959, 5-15, *ΠΑΕ 1955* 1960, 53-61, *ΠΑΕ 1956*, 1961, 45-54, *ΑΔ* 16, Β, *Χρονικά: 1960*, 1962, 33-35, *Εργον 1961*, 1962, 3-9, *Εργον 1962*, 1963, 3-16, *ΠΑΕ 1958*, 1965, 5-13, *ΠΑΕ 1959*, 1965, 8-11, *ΠΑΕ 1960*, 1966, 318-323, *ΠΑΕ*

- 1961, 1964, 5-13, *IIAE 1962*, 1966, 5-11, *IIAE 1963*, 1966, 5-28. さらに, *BCH* 80, 1956, 240, *BCH* 81, 1957, 507-509, *BCH* 83, 1959, 576-582, *BCH* 84, 1960, 644-646, *BCH* 85, 1961, 618, *BCH* 86, 1962, 654-657, *BCH* 87, 1963, 693-697, *BCH* 88, 1964, 682-691.
- 9 Mazarakis Ainian & Livieratou 2010, Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, Eliopoulos 2020.
- 10 たとえばイタケ島ポリスは洞窟遺跡と言われていたが、21世紀に入ってから洞窟ではなかったことが明らかとされた (高橋 2023, 46-48頁)。
- 11 *IIAE 1955*, 1960, 57.
- 12 *IIAE 1955*, 1960, 56, *IIAE 1956*, 1961, 54.
- 13 *IIAE 1956*, 1961, 53-54, *AA* 16, B, *Χρονικά: 1960*, 1962, 34.
- 14 Eliopoulos 2020.
- 15 Eliopoulos 2020.
- 16 *IIAE 1956*, 1961, 53.
- 17 *IIAE 1956*, 1961, 54. Cf. *Εργον 1958* 1959, 8-9.
- 18 *IIAE 1955*, 1960, 56.
- 19 Travlos 1971, 42.
- 20 Travlos 1971, 42, 廣川 1999, 19頁。
- 21 パウサニアス (I.29.2) もこの場所の体育所に言及している。「かつてはさる個人の私有地だったが、私の頃には体育所となっている」、パウサニアス (上)、馬場訳、137頁)。
- 22 プラトンの学園アカデメイアの創設の時期に関しては、廣川 1999, 80-91頁。
- 23 学園の危機および閉鎖に関しては、廣川 1999, 251-289頁。
- 24 廣川 1999, 15-16頁、納富 2015, 2-8頁。
- 25 納富 2015, 2-20頁。
- 26 Mazarakis Ainian & Livieratou 2010, 88, Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 165.
- 27 Mazarakis Ainian & Livieratou 2010, 89.
- 28 Mazarakis Ainian & Livieratou 2010, Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011.
- 29 *IIAE 1958*, 1965, 8-9.
- 30 Mazarakis Ainian & Livieratou 2010, 89-90.
- 31 Coldstream 1977, 347, Coldstream 2003, 347. 当初は原幾何学文様期と初期幾何学文様期のどちらか結論を出さずにいた (Coldstream 1968, 399, Coldstream 2008, 399)。
- 32 Mazarakis Ainian & Livieratou 2010, 90-92. ただし、原幾何学文様期と記す概説書も存在する (Osborne 1996, 47)。
- 33 Mazarakis Ainian & Livieratou 2010, 93, Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 166.
- 34 *IIAE 1958* 1965, 8. Cf. Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 166.
- 35 Mazarakis Ainian 1997, 140, n.944.
- 36 *IIAE 1958* 1965, 5-9, *IIAE 1960* 1966, 321-323, *IIAE 1961*, 1964, 8-10, *IIAE 1962*, 1966, 5-7, *AA* 16, B, *Χρονικά: 1960*, 1962, 34.
- 37 Snodgrass 1971, 398, Coldstream 1977, 347.
- 38 Kourou 1985, 23-24, Fagerström 1988, 46-47.
- 39 Coldstream 1976, 16, Whitley 1994, 221, n.42, Antonaccio 1995, 187-189.
- 40 ほかにこの遺構に言及がある文献として、たとえば、Hiller 1983, 13, Lauter 1985,

- 159-162. またそれまでの文献が網羅的に紹介されている著作として、Mazarakis Ainian 1997, 140, n.945.
- 41 Mazarakis Ainian & Livieratou 2010, 94-96, Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 166-169.
- 42 すべて建物の外側での計測である (Mazarakis Ainian 1997, 141, Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 166, n.5)。
- 43 *IIAE 1958*, 1965, 7, *IIAE 1962*, 1966, 6, Mazarakis Ainian 1997, 141, Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 166.
- 44 Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 166. 当初マザラキス・アイニアンは少なくとも2回の建造時期に分けられると記していた (Mazarakis Ainian 1997, 141, line 18)。
- 45 Mazarakis Ainian 1997, 141. 同じ頁の最初の行では主要な部屋 (α と α')のほかに二部屋 (β と ζ)が元来の構造であると記載されているが、部屋 ζ はおそらく二番目の建造時期に属すると思われる (Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 183, fig.8a-b)。
- 46 さらに動物の骨片2個と初期青銅器時代の土器片数個も発見された (Mazarakis Ainian 1997, 141, n.948)。またこの遺構の土層は四つに区分される (Mazarakis Ainian 1997, 141)。
- 47 *IIAE 1958* 1965, 8.
- 48 Lauter 1985, 159-160, Fagerström 1988, 46, 137.
- 49 Mazarakis Ainian 1997, 141.
- 50 貝殻が出土した場所もある (Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 167, n.7)。
- 51 Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 167.
- 52 Fagerström 1988, 47.
- 53 Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 168.
- 54 Mazarakis Ainian 1997, 141, Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 167.
- 55 Lauter 1985, 160, Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 168.
- 56 Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 174.
- 57 *IIAE 1956*, 1961, 54. Cf. *Εργον 1958*, 1959, 8-9. さらに、Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 166, Eliopoulos 2020, 356. 邦語文献でこの問題に関連がある記載として、パウサニアス (上)、馬場訳、266-267頁。
- 58 Cf. Antonaccio 1995.
- 59 Whitley 1994, 221, Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 173.
- 60 Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 170. また底の方から子供の墓 (墓1) が発見されたが、この竪穴との関係は不明である (Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 170)。
- 61 Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 169-170.
- 62 Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 169-171.
- 63 Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 171.
- 64 *IIAE 1956*, 1961, 47-53.
- 65 Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 171-172.
- 66 *IIAE 1959*, 1965, 10, *IIAE 1961*, 1964, 7. Cf. Mazarakis Ainian 1997, 142-143, Mazarakis Ainian & Livieratou 2010, 98.

- 67 Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 174.
68 初期鉄器時代の編年に関しては、高橋 2019、226-248頁を参照。
69 Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 174.
70 このような問題に関しては、cf. Antonaccio 1995.
71 Mazarakis Ainian & Alexandridou 2011, 175.

略記一覧

| | |
|-------|--|
| AA | <i>Αρχαιολογικόν Δελτίον</i> |
| AJA | <i>American Journal of Archaeology</i> |
| BCH | <i>Bulletin de correspondance hellénique</i> |
| Έργον | <i>Το Έργον της Αρχαιολογικής Εταιρείας</i> |
| JHS | <i>Journal of Hellenic Studies</i> |
| ΠΑΑ | <i>Πρακτικά της Ακαδημίας Αθηνών</i> |
| ΠΑΕ | <i>Πρακτικά της εν Αθήναις Αρχαιολογικής Εταιρείας</i> |

パウサニアス (上)、馬場訳

パウサニアス『ギリシア案内記』(上)、馬場恵二訳、岩波書店、1991年。

文献一覧

- Antonaccio, C. M. 1995: *An Archaeology of Ancestors: Tomb Cult and Hero Cult in Early Greece*, Lanham.
- Coldstream, J. N. 1968: *Greek Geometric Pottery: A Survey of Ten Local Styles and their Chronology*, London.
- 1976: Hero-Cults in the Age of Homer, *JHS* 96, 8-17.
- 1977: *Geometric Greece*, London.
- 2003: *Geometric Greece*, second edition, London & New York.
- 2008: *Greek Geometric Pottery: A Survey of Ten Local Styles and their Chronology*, updated second edition, Bristol.
- Eliopoulos, T. 2020: New Evidence on the Early Helladic “House of Akademos” in Plato’s Academy, in N. Papadimitriou, J. C. Wright, S. Fachard, N. Polychronakou-Sgouritsa & E. Andriku eds., *Athens and Attica in Prehistory: Proceedings of the International Conference, Athens, 27-31 May 2015*, Oxford, 2020, 349-356.
- Fagerström, K. 1988: *Greek Iron Age Architecture: Developments through Changing Times*, Studies Mediterranean Archaeology LXXXI, Göteborg.
- Hiller, S. 1983: Possible Historical Reasons for the Rediscovery of the Mycenaean Past in the Age of Homer, in R. Hägg ed., *The Greek Renaissance of the Eighth Century B. C.: Tradition and Innovation —Proceedings of the Second International Symposium at the Swedish Institute in Athens, 1-5 June, 1981*, Stockholm, 1983, 9-15.
- Kourou, N. 1985: *Οικισμοί και Ιερά των Πρώιμων Ιστορικών Χρόνων: Σημειώσεις*

- Πανεπιστημιακὸν Παραδόσεων Θερινὸν Εξαμῆνου 1984-85*, Αθήνα.
- Lauter, H. 1985: *Der Kultplatz auf dem Turkovuni*, Attische Forschungen I, Berlin.
- Mazarakis Ainian, A. 1997: *From Rulers' Dwellings to Temples: Architecture, Religion and Society in Early Iron Age Greece (1100-700 B. C.)*, Jonsered.
- Mazarakis Ainian, A. & A. Alexandridou 2011: The "Sacred House" of the Academy Revisited, in A. Mazarakis Ainian ed., *The "Dark Ages" Revisited: Acts of an International Symposium in Memory of William D. E. Coulson, University of Thessaly, Volos, 14-17 June 2007*, vol.I, 2011, Volos, 165-189.
- Mazarakis Ainian, A. & A. Livieratou 2010: The Academy of Plato in the Early Iron Age, in H. Lohmann & T. Mattern eds., *Attika: Archäologie einer „zentralen“ Kulturlandschaft — Akten der internationalen Tagung vom 18.-20. Mai 2007 in Marburg*, Wiesbaden, 2010, 87-100.
- Osborne, R. 1996: *Greece in the Making 1200-479 BC*, London & New York.
- Snodgrass, A. M. 1971: *The Dark Age of Greece: An Archaeological Survey of the Eleventh to the Eighth Centuries BC*, Edinburgh.
- Travlos, J. 1971: *Pictorial Dictionary of Ancient Athens*, New York.
- Whitley, J. 1994: The Monuments that Stood before Marathon: Tomb Cult and Hero Cult in Archaic Attica, *AJA* 98, 213-230.
- 高橋裕子 2019: 「ギリシアの初期鉄器時代に関する時代名称と編年体系」『マテシス・ウニウエルサリス』第20巻第2号、213-260頁。
- 2023: 「ギリシアの初期鉄器時代の遺跡（6）イタケ島のポリスとアエトス」『マテシス・ウニウエルサリス』第25巻第1号、43-64頁。
- 納富信留 2015: 『プラトンとの哲学：対話篇をよむ』岩波書店。
- 廣川洋一 1999: 『プラトンの学園 アカデメイア』講談社。

